POLE

第１１２号
北海道ポーランド文化協会 会誌「ポーレ」
２０２４.５.１

《第 111 回例会》
講演＆ビデオ上映

2024. **5/26**（日）13：30～
札幌エルプラザ４Ｆ大研修室 AB

# カティンの森事件とモンゴル・シベリア抑留

後援 シベリア抑留体験を語る会札幌

## 満洲でカティンの森事件に注目していた男

～自著『命の嘆願書』より～

【講演】
井手 裕彦

「あの事件の傷はポーランド国民の心に深く残っているんですよ」。2017年9月、観光で訪れたワルシャワで、第2次世界大戦中、ソ連軍の捕虜になっていたポーランド軍将校ら2万人以上が虐殺された「カティンの森事件」の慰霊碑を通った時、ガイドさんからそう言われました。

でもまさか自分が昨年8月上梓した『命の嘆願書～モンゴル・シベリア抑留日本人の知られざる物語を追って』(集広舎)で、虐殺現場から6500キロ以上離れた満洲で事件に注目していた人物を追跡するとは思いもよりませんでした。

その人物とは大戦後、モンゴルに抑留された同胞の命を守るため自らの危険も顧みずにモンゴル政府に嘆願書を提出していた日本軍部隊指揮官、小林多美男(1914～89)=左写真=でした。

小林は憲兵として対ソ諜報に当たっていた時、カティンの森で起きた虐殺の情報をつかみます。日本の降伏後に同様の暴虐が開拓団員らに起きる恐れを感じ、上官へ働きかけます。それを機に小林の運命も大きく変わり、私の長年の抑留取材でも聞いたことがなかった凄絶な抑留生活を経験することになります。

小林の生き様を紹介しながら、同じソ連の国際犯罪による悲劇であるカティンの森事件とシベリア抑留の接点を皆さんと考えたいと思っています。

（いで・ひろひこ、読売新聞元大阪本社論説委員・編集委員）

## *No more silence*
## 「無念の想い、俺ら捕虜でねえ」

【語り部の名言とビデオ上映】
建部 奈津子

来年戦後80年を迎えます。現在シベリア抑留体験者の平均年齢は101歳になり、全国でご存命の方は推定4～5千人と言われています。

第二次世界大戦終戦後に起きたシベリア抑留。体験者の多くは家族にすら、何も話さないまま他界されました。なぜ今その重く閉ざされた口が開いたのでしょうか。

厚生労働省の発表では、57万5千人がシベリアやモンゴルに抑留されたと言われています。酷寒・飢餓・重労働そして思想教育の四重苦。亡くなる時に「お母さん」と叫びながら命を閉じました。戦死ではありません。生きていたら、きっと言いたいことがあったはずです。

帰国後の苦悩、いまだ帰らぬ遺骨。

体験者へ何年もかけて何度も聴き取りをした結果、初めて聴くことがあります。

テレビや新聞では報道されない事実。体験者の個人的な想い。終戦間際に召集された体験者の口から出た共通した言葉「おれら戦争をしていない。戦争に負けたんじゃないから捕虜ではない」。若くして無念に異国の地で亡くなった仲間も、きっとそう言いたいのではないだろうか。コロナ禍を経て、亡くなった仲間の代弁者として使命を果たす語り部の西野忠士氏=上写真=。DVD 上映を交えてシベリア抑留体験者98歳生き証人の声をぜひこの機会に聴いてください。

（たてべ・なつこ、シベリア抑留体験を語る会札幌 会長）

入場無料、定員 40 人、予約推奨【お問合せ先】hokkaidopolandca@gmail.com, 080-4071-0956（安藤）

第 112 回例会
ご案内

2024. **6/29** (土)

13：30～

札幌エルプラザ４F 中研修室

後援　平取町立二風谷アイヌ文化博物館

## 講演と報告とドキュメンタリー映画『Ainu｜ひと』上映

ブロニスワフ・ピウスツキのいま

ポーランド

英国における

アイヌ文化への関心

アイヌ文様の彫刻体験 JHL 2024/３

アイヌ古式舞踊の披露 JHL 2024/２

ワルシャワ上映会(2023/9/10)にオンライン出演した 溝口監督

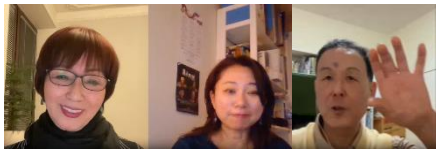
Ⅰ　講演：長田佳宏 平取町立二風谷アイヌ文化博物館長

ジャパン・ハウス ロンドン JHL におけるアイヌ文化展について

Ⅱ〈ビデオレター〉溝口尚美 監督(在ニューヨーク)

『Ainu｜ひと』ワルシャワ上映会の報告

観客の声：三和昭子さん(在ハルクローヴァ) /石塚芳明さん(在ワルシャワ)



今回ビデオレターに出演する 三和さん/溝口監督/石塚さん

Ⅲ　ドキュメンタリー映画『Ainu｜ひと』2018｜81 分 上映

入場無料、定員 40 人、予約推奨【お問合せ先】hokkaidopolandca@gmail.com, 080-4071-0956（安藤）

### ロンドンで沙流のアイヌ文化を発信する
### ～1910 年と 2023 年の取り組みを主として～

長田 佳宏

### ドキュメンタリー映画『Ainu｜ひと』の制作経緯

溝口 尚美

2023年11月16日から翌年4月21日までの約5か月間、ロンドンに所在するジャパン・ハウス ロンドンで“Ainu Stories：Contemporary Lives by the Saru River”展が行われました。

北海道アイヌの様々な文化継承や今日的な姿を発信する企画として、2018年から JHL と北海道大学アイヌ・先住民研究センター、平取町が構想を練る中で進められてきました。途中、コロナ禍により開催が危ぶまれもしましたが、多くの平取町民の協力を得て無事開催に至りました。

展示の内容は今日のアイヌ文化継承や暮らしの紹介を主としつつ、イギリスと沙流アイヌの歴史的な関わりも随所に織り込んでいます。

その一つに1910年にロンドンで開催された日英博覧会があります。博覧会会場にはブロニスワフ・ピウスツキも赴き、アイヌとの交流の中で多くの口承文芸が採集されたと言われています。

“Ainu Stories”展は、この出来事から113年を経て開催された大規模なアイヌ文化の普及事業です。講演では様々な資料をとおしてこの2つの催しを紹介し、一世紀を超えた沙流アイヌの想いを伝えます。

（おさだ・よしひろ）

「日本の Ainu という先住民族は、どんな暮らしをしているの？」というコロンビア人とチリ人の同僚からの問いに答えられなかった事が、私がアイヌ民族に興味を持つきっかけでした。関西からニューヨークに移住して4年目の2008年、先住民が自ら映像制作する事を目的とする非営利団体を設立した年です。

母国の先住民の事を知らなければ！と北海道に飛び、平取町を訪れました。当初は地球の裏側で暮らす先住民族同士のビデオ交流を模索しましたが、2014年に団体を辞任し、二風谷アイヌ文化博物館と私との協働制作という形で映像を記録し始め、2018年にドキュメンタリー映画『Ainu｜ひと』を完成させました。

この作品は地元の人々の協力なしには生まれなかったものです。二風谷アイヌ語教室へ初めて見学に行った時、緊張気味の私に運営委員長の川奈野一信さんが「どっから来たんだい？」と声をかけて下さり、アイヌの事を勉強したいのにお金に困っているなら…という言葉に甘えてホームステイをさせてもらう事になり、約10年の間に地域の様々な人たちとも交流できました。

映像には、主人公4人のストーリーだけでなく、カメラを持つ「私」と映っている「ひと」との関係も記録されているのでご注目ください。

（みぞぐち・なおみ）



助成 ポーランド広報文化センター INSTYTUT POLSKI TOKIO

第 110 回例会
報 告

# ポーランド名作映画ビデオ鑑賞2024

## 『イレブン・ミニッツ 11MINUTES』 3/9

本例会は合計35名（うち一般24名）参加と盛会でした。本作はイエジー・スコリモフスキ監督による批評家受けのするやや難解な群像劇であるため、映画研究者の坂尻昌平先生に解説をお願いし、また初めての試みとして先生のご希望で同監督の経歴など前説を語って頂きました。=右写真=

画面に何度も現れる黒い点などは、マクガフィン（登場人物への動機付けや話を進めるためのアイテム）で、ヒッチコックのそれとは違うタイプだと説明があり、ポーランド映画では、一見無関係に見えるものが深い所で繋がっていたり、偶然と必然が裏腹というタイプの映画も多く、事件の偶然性を強調するために用いられているのではないかとのことです。

会場から、ホテルの部屋番号「1111」の意味が問われ、ポーランドの独立記念日ではないかとの指摘もあり、坂尻氏は、監督は愛国心の強い人なので、そういう意味もあるかもしれないと答えました。

アンケートでは「大変良かった」（5点）8名、「良かった」（4点）5名、「普通」（3点）5名で、平均4.2点とまずまず高評価でしたが、「よく分らない」「疲れた」との声もありました。反省点は解説に時間をかけた分、参加者の議論が十分にできなかったことで、開催時刻も含め、今後の課題としたいと思います。

（池田光良）

◆アンケートの感想より

| | |
|---|---|
| 良い機会を有難うございました。他のポーランド映画も観てみたくなりました。（50代） | とても面白い映画でした。音楽もカッコ良かったです。（60代） |
| 複雑に入り組んだストーリーに引き込まれました。人生は偶然の上に成り立っている、次の瞬間も不確かだ、何が起こるかわからない、というメッセージでしょうか。（60代） | ついて行くのが大変だった。さまざまな人生を生きる登場人物たちの11分間の出来事が交錯して惨劇へと進んでいく。すごく怖かったです。（70代） |
| ポーランド映画は全くなじみがなかったが、今回観たことで、機会があればまた観てみたくなった。（60代） | 一瞬たりとも退屈しない面白い映画でした。鑑賞できて良かったです！（60代） |
| 鑑賞後、見知らぬ人々の運命（特に悪い）の混とんとした交差を感じる作品と感じ、日本と同様に、普通の生活の中にどこか不安や混とんを感じさせられる思いを感じました。楽しい作品ではありませんでしたが、非常に面白く鑑賞させて頂きました。（60代） | ポランスキーしか知らなかったので、ポーランド映画をもっと観てみようと想いました。（あ、トリコロールは観ましたが!!）良いきっかけをありがとうございました。日本の『雪女』のように想像がふくらむ（いかようにもとらえられる）映画でした。（50代） |
| 映像に取り上げられた人物の中で亡くなった人が11人か数えたが、11人は超えていた。何を伝えたいかわからない。しかし「何を伝えたいか（あれかな？これかな？など）を考えさせられてしまう」映画だと思った。シスター、犯罪者、芸能人、善人そうな画家、医者も死んだ。何か意味が？（30代） | 現代映画というのか、11分の間にいろいろなことが起きて…ということなのですが（それは現実にそうなのでしょうが）、一つ一つの事象の前が分からないし、事象相互の関連性がよく見えないし、映画としては面白いものではなかった（残って話し合いに参加すればよかったかもしれませんが、時間がありませんでした）。（70代） |
| 既に観ていた作品ですが、この作品は人それぞれに解釈が異なると思います。解説者のみならず、参加者の感想も聞きたかったと想いました。 | ひきこまれて見てはいたが、難解な映画だった。一見無関係な人々の人生が錯綜し、絡み合っているのは分るのだが、そこから先がよく分らなかった。（60代） |
| 疲れました。（60代）<br>よく理解できなかった！（80代） | 普段観てるものと違い難解な作品でした。ほかの作品も観てポーランド映画少し勉強したい。（80代） |
| 映画はバニシング・ポイント（消滅点）に向って一見無関係に進みますが、最後の最後に繋がる計算づくの展開で、見事なものです。大変面白く見させて頂きました。ポーランドは時々こんな傑作を出しますね。また機会がありましたら教えて下さい。 | |

イエジー・スコリモフスキ 監督・脚本
2015 年/カラー/ポーランド、アイルランド/81 分/ブルーレイ　映画研究者の坂尻昌平氏によるトーク

## 日本に於けるショパンの受容について（３）　川染 雅嗣

過去２回の連載では明治期に於けるショパンの受容について述べてきた。そこではショパン研究者の多田純一氏の論文や著書を参考にして、ショパンの受容についてそのおおよそのところを読者諸氏にご紹介した。＊

澤田柳吉という日本で初のショパン弾きと言われた人物にも言及してみた。おそらく、ショパンという作曲家はあまりにも身近過ぎて、その音楽がどのようにして日本に輸入され定着していったかについて、考えたこともなかったというのが正直な感想ではなかろうか。気がついたらいつも自分のそばに寄り添っていたのがショパンなのだ。

### 日本人の情緒とショパンの音楽

今回は少し趣向を変えてみたい。前回までのようなやや学術的な話題ではなく、日本人の情緒とショパンの音楽の関係について書いてみたい。

皆さんはこんな噂を耳にしたことがあるだろうか。ポップスや歌謡曲の名曲の中には、クラシックからその旋律を拝借したものが多々あることを。その例をいくつか挙げてみよう。

**１．ドラマ「北の国から」のテーマ音楽**

これはさだまさし作曲で、ドラマの冒頭に流れるいわばメインテーマだ。歌詞はなくスキャットで歌われるのがこの曲の特徴だ。この原曲はL.v.ベートーヴェンの声楽曲“Ich liebe dich”だ。さだ自身が意図してベートーヴェンから借用したのかどうかは不明であるが、リズムやメロディーの動きに若干の違いはあるものの、とてもよく似ている。

実はもう一つの候補曲がある、それは W.A.モーツァルトの〈ホルン協奏曲 第1番 第1楽章〉の第1主題という説だ。こちらもよく似ている。

**２．ヨドバシカメラの CM ソング**

テレビでお馴染みの曲で、1975年から店頭で流れているというから驚きである。元歌はアメリカ南北戦争当時の愛唱歌〈リパブリック賛歌〉。ロシアの作曲家 A.グラズノフも自身の〈勝利の行進曲 Op.40〉にこのメロディーをモチーフとして用いている。

**３．牧美智子の〈わたしのギャラリー〉**

これは W.A.モーツァルトの〈交響曲第40番 第1楽章〉の冒頭の主題をそのまま使っている。潔いくらいである。これはもうカバーと言っても良いだろう。サビに入ると変化していくのだが、ここまで大胆にクラシックを使った作曲の高田弘も大したものだ。1977年の作品である。

すっかり前置きが長くなってしまったが、ここからいよいよ本題に入る。

### 松島つねの名曲〈おうま〉

ではショパンの場合はどうなのだろう。

皆さんは松島つねという作曲家をご存知だろうか。1890年に生まれ、1985年に没している。彼女はここで話題にしている澤田柳吉より4年後に生まれ、同じく東京音楽学校で学んだ作曲家・ピアニスト・ピアノ教師である。

彼女が残した名曲に〈おうま〉がある。誰でも知っている曲だ。この曲の冒頭部分はショパンの〈練習曲 変イ長調 Op.25-1〉にそっくりだ。一度聴いてみて欲しい。だがこれはまだ序の口で、実はまだまだ先があるのだが、今回はここで字数が尽きたようだ。次回は更に興味深い例をご紹介し、若干の音楽的・心理的分析も試みてみたい。　（つづく）

（かわそめ・まさし、昭和音楽大学特任教授）

新刊紹介

## 現代ポーランド音楽の１００年 ～シマノフスキからペンデレツキまで～

ダヌータ・グヴィズダランカ（著） 白木太一、重川真紀（訳）

音楽之友社 ２０２３.１２

ショパン以外に我々はポーランドの作曲家をどれだけ知っているだろうか。音楽に詳しければ、シマノフスキやルトスワフスキ、ペンデレツキなどの名前はなじみ深いだろうが、本書にはこれらのほか、おそらく音楽関係者にもほとんど知られていない作曲家がたくさん登場する。「現代ポーランド音楽」とタイトルにはあるが、現代のみならず、かなり古い時代からのポーランド音楽の歴史がはじめの二章で詳しくまとめられ、まずその情報の量と密度に圧倒される。さらに残りの章では、ポーランド音楽の「ポーランド性」や新しい音楽の模索のあり方、オペラのジャンル、女性音楽家、亡命などのテーマが立てられ、ポ



＊ http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE110-111_ChopinJapanKawasome.pdf

ーランド音楽を立体的に概観できる構成になっている。これは類書にはあまり見られない特徴だろう。

### 国家の歴史と音楽の深い関係

本書を読んで特に印象深いのは、国家の歴史と音楽の深い関係である。音楽と社会の関係はどの国の音楽史においても語られるが、これほどまでに世界史的事件が頻発し、音楽家が政治や社会と直接関わる音楽史は他にあまりないだろう。

例えば、ヨゼフ・コフレルという作曲家の例が語られる。彼は1896年にハプスブルク帝国で「ヨゼフ・コフラー」として生まれ、ポーランド領のルヴフで「ユゼフ・コフレル」として音楽活動に従事し、1939年には同じ場所で、今度はソ連市民として「ヨシフ・ゲルマノヴィチ・コフレル」になり、そしてその3年後には、第三帝国で義務付けられた法から排除されたユダヤ人「ヨセフ・コフレル」になる。このように多くのポーランドの音楽家たちは、国家の複雑な歴史の中に直に巻き込まれてきたのである。

20世紀の歴史の中で、ポーランドにとっての最大の事件の一つは社会主義の経験であろう。それはソ連も同じだが、ソ連とポーランドの音楽界の違いが面白い。「社会主義リアリズム」の生みの親だったソ連とは異なり、それを押し付けられたポーランドでは、それがドグマとなって音楽界を支配したのはほんの短い期間だったため、その路線で作曲家が育成されることはなかった。逆に、社会主義リアリズムはそれまでの民族性への過度の固執から解放してくれ、ポーランド音楽を新たな跳躍へと導いた功績の方が大きいとすらいう。

### 国際現代音楽祭「ワルシャワの秋」

また、ソ連と異なり、音楽にはあまり政治の介入が強くなかった社会主義国ポーランドならではの現象として、1956年から開催されている国際現代音楽祭「ワルシャワの秋」も興味深い。これは「東西の架橋の役割」を果たし、西側、東側両方の現代音楽が同時に取り上げられるという、他にはない現象が見られた。

本書では、このようなポーランド独特の社会的文脈の中で音楽の様々な事象が語られていく。だから、膨大な数の人物の活動や楽曲に関する詳細な記述に圧倒されつつも、無味乾燥な教科書的記述ではなく、音楽を取り巻く歴史的、政治的文脈の中でそれぞれの人物がどのような思いで、どのような立場でそれぞれの音楽活動を行っていたかが伝わってくるので、読者は臨場感をもって興味深く読み進めることができる。

ポーランド音楽研究の第一人者による詳細な音楽史である本書は、このように多くの歴史的事象と絡めながら論じられているため、その翻訳は訳者に様々な知識を要求する大変な作業であったことと推察される。その点、本書の翻訳はポーランド史専門の訳者とポーランド音楽専門の訳者二人による共同作業によるもので、信頼のおける翻訳になっていると思われる。ポーランドの歴史、文化、音楽に関心のあるすべての人に手に取ってもらいたい良書である。　（高橋健一郎、大阪大学教授）

ポーランドの巨匠
アグニエシュカ・ホランド 監督の話題作

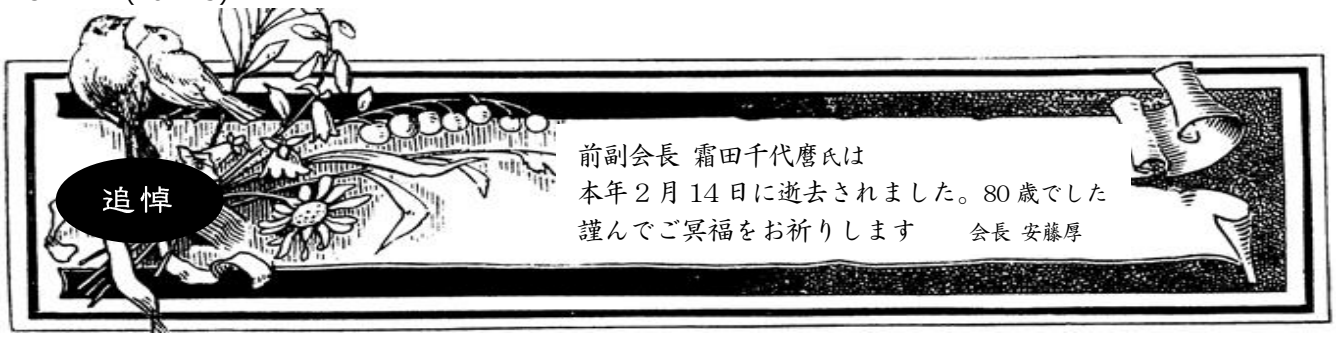
2023 年｜ポーランド、フランス、チェコ、ベルギー合作
152 分｜ビスタ｜カラー・モノクロ｜5.1ch
原題：Zielona Granica｜英題：Green Border

「ベラルーシを経由してポーランド国境を渡れば、安全にヨーロッパに入ることができる」という情報を信じて祖国を脱出した、幼い子どもを連れたシリア人家族。しかし、亡命を求め国境の森までたどり着いた彼らを待ち受けていたのは、武装した国境警備隊だった……。

〈監督〉Agnieszka Holland（アグニエシュカ・ホランド）　1948 年ワルシャワ生まれ。プラハで映画制作を学び、70 年代からアンジェイ・ワイダ運営の映画ユニット「X」に所属。1980 年、国際映画批評家連盟賞受賞。翌年の戒厳令を機に西欧に移住。85 年以来 3 度アカデミー外国語映画賞にノミネート。『ソハの地下水道』2012、『赤い闇　スターリンの冷たい大地で』2019 など。2020 年、ヨーロッパ映画アカデミー会長に就任。

〈監督声明〉
映画は無力ではありません。
世界と人間の運命についての真実を、
異なる視点から多面的に映し出すことができるのです。

KINO
2024. 5/4（土）～シアターキノ（中央区狸小路 6 丁目）
上映時間・期間はご確認ください 011-231-9355




### ヤドヴィガ・ロドヴィチ＝チェホフスカ

私たちの親愛なる「Maro」、霜田千代麿氏の訃報に大変ショックを受けております。彼はとても大切な人で、ポーランド国内外の多くの人々にとってとても重要な人物でした。

最後にお会いしたのは2022年11月、札幌でした。その時は手の力も弱く、かなり衰弱されているようでしたが、もう会えないとは思いませんでした。

お気の毒でなりません。

ご存知のとおり、私の夫のヴァルデク（ワレマール）は彼のとても良い友人になりましたが、彼もこの悲しい知らせに同様に動揺しています。

どうか心よりお悔やみの言葉をお受け取り下さい。

私たちは彼のために祈ります。私たちは彼のことを決して忘れません。

私が Facebook*にマロの死についてメモを置いたところ、人々がメッセージや反応を送ってくれました。

私はそれらを日本語に翻訳しました。これらのメッセージが翌日の悲しい式典に少しでも良い感情をもたらすことを願っています。

(左から)ルーカス・クロスさん、パヴェウ・ヤニュシュさん
Włodzimierz Kwieciński 会長、霜田英麿氏

世界伝統空手道連盟のヴウォジミェシュ・クフィェチンスキ会長が式典に出席するために北海道へ行くことを知っています。彼はポーランドのスタラ・ヴィェシュ道場から土を持って行きます。

Facebook からのこれらのメッセージが、私たちの最愛のマロとポーランドの友人たちのお別れのセレモニーに花を添えますように。（Jadwiga Rodowicz-Czechowska 元駐日ポーランド共和国大使）

### 長屋 のり子

霜田千代麿さんは事もなげに生の果ての回転扉を押して彼岸の人になってしまった。あの何かが喉につかえたような、音域の広い独特の声がもう聴けない。死因は「老衰」と聞く。死は、今はもうその悲しみ、寂寥さえ削がれるような、必然の静かさで彼にひっそり舞い降りたと知る。仏教に深く帰依した人の法悦に近い、たっぷりとした仏光に包まれた穏やかな死と知れば、執拗に悲しむまい、と思う。

生前に自分の思うところの全てをやり切った人は稀有に近い。彼は自分の肉体の全部を賭して海を渡り、世界に猪突猛進して、今は伝説（レジェンド）と呼んでいい、あのポーランドでの寺山修司との出逢いをはじめとする奇蹟のような彼の生きた歴史を切り開き集積した。

私の手元に、国際寺山修司学会の分厚い研究誌に掲載された、彼の大部の論文がある。寺山修司と母親との関係を「阿闍世コンプレックス」として把えたものだ。（因みに彼の大学卒業論文は『運命と宿業感について～ギリシャ悲劇と観経との照応』副論文『ギリシャ悲劇「オイディプス王」観経・涅槃経「阿闍世王」梗概』）

彼は前衛的な「書（カリグラフィ）」「空手」「グロトフスキ実験劇場研修生」等々、マッチョな趣味人としての印象が強烈だが、彼の根幹は深く「知」を探る人だったと私は確信している。十数年前、私の企画した加島祥造展（小樽祝津）に千代麿さんは岩見沢から殆ど毎日、足を運び、白鳥番屋に長く滞在した加島祥造氏（当時『求めない』のミリオンセラーで時の人であった！）の前に正座して、「老子、タオ」の思想に、まさに真っ向から日々果敢に喰らいついていた。その時の千代麿さんの眼の光の鋭利犀利一途を私は今も忘れていない。その情熱の量いつも夥しかった。

千代麿さんの私に遺した彼の本質ののぞく俳句

破れたるま丶の蜘蛛の囲（い）クモは吾

逝去の悲しみは悲しみのまま涙拭って
哀悼　愛悼　千代麿さん
*See you soon, Catch you later!*　（ながや・のりこ）



* https://www.facebook.com/jadwiga.rodowicz/posts/pfbid02wZUoWv3NaJEtREUrxUHfytoQpSnhJpYKAf5cEVq6Dk6bbViEmMQPc2M3ZheDWTh9l

小林 暁子

春の雪消えるが如く君去りぬ　暁子

改めて思い返してみると、霜田千代麿さんとは37年前のポ文協設立準備委員会でご一緒して以来、2回のポーランド旅行、3回の池田町への修学旅行、2011年から毎年企画してきた午後のポエジアなど、ずいぶん行動を共にしてきました。

第2回ポーランド旅行の時「夏至」の初代主宰の依田明倫先生が沢山の俳句仲間を誘って参加してくださったのがご縁で、私は今から12年前、千代麿さんに勧められて入会しました。その後、推薦を受けて同人となった「古志」に偶然千代麿さんも入会していました。今考えてみると、生涯多くの事に情熱をこめて取り組んできた千代麿さんが、最後に全身全霊をもってやり遂げたかったのは俳句だったような気がします。

去年の9月8日、「夏至」の主宰・佐藤宣子先生から、千代麿さんが句集を出すので10月20日までに120句選んでほしい、との電話がありました。そのすぐあと本人からも、選句依頼の電話があり、体調がすぐれず、選句ができないというのです。私が持っている千代麿さんの俳句の資料は、ここ12年の「夏至」「古志」「ポーレ」だけでしたが、意見を交換する時間はもうなかった。「任せるから」という言葉に押され、千代麿さんが残したいだろうと思う句を120句選び、10月16日に主宰にメールで送りました。

千代麿さんにもその旨報告し「とてもいい句ばかりで選ぶのに苦労しました」というと、「ああよかった」と笑っていました。千代麿さんの生きた証の句集は、3月上旬に出来上がりました。

句の道を求め求めて梅の里　暁子

（こばやし・あきこ）

新刊紹介

## 『祖霊祭』による祖霊祭

ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ(編)

スレユヴェク市のユゼフ・ピウスツキ博物館 刊 ２０２３.１２

Inne, a jednak *Dziady*. (ed.) Jadwiga Rodowicz-Czechowska. Muzeum Józefa Piłsudskiego w Sulejówku

ポーランド・アイヌ『祖霊祭』プロジェクト2022の報告書が発行された。プロジェクトはヤドヴィガ・ロドヴィッチ元駐日ポーランド大使が実施されたもので、この報告書にはポーランド語、英語、日本語と三か国語が並んでいる。

骨子は、ポーランドの詩人アダム・ミツキェヴィッチの作品「祖霊祭」と、アイヌ研究者として知られるブロニスワフ・ピウスツキからのアイヌの祖先への祈り(シンヌラッパ)を結び付けたものである。

最初にピウスツキの孫である木村和保氏（1955～2022）の言葉が載る。これは2018年の国際会議での発言。祖父であるピウスツキのことから始まるが、研究と称して墓を暴き大学の倉庫に保管しているアイヌの人たちの遺骨が未だに返還されていないことなど。

この件に関しては別のページでも”涙をふいて／聞いてくれ／わしらの／涙も凍る話をな”と土橋芳美著『痛みのペンリウク～囚われのアイヌ人骨』（草風館、2017）から引用して訴える。

ロドヴィッチ氏は「祖霊祭」の内容を中心に、ミツキェヴィッチのことや治癒性のある独自の調味料キハダと言われる木の実のことなどを紹介している（今回の表紙=背景写真=がこの実）。

また2022年7月に札幌エルプラザで行われた「午後のポエジア」での『祖霊祭』の朗読が紹介されている。参加者として村咲紫音、村田譲、林家とんでん平、氏間多伊子、ラファウ・ジェプカ、菅原未榮、シルヴィア・オレーヤージュ各氏の名前が載っている。

11月のかでる2・7での講演と朗読、シアターZOOでのポーランド・アイヌ祖霊祭“シンヌラッパ・クンネニサッ”がアイヌ・日・英/波の三つの言語で表示され、告知ポスターや公演会の様子が写真などによって詳しく掲載されていて、カラフルで見るだけでも楽しい。

この報告書で個人的にいちばん注目したのは「アイヌ語に関するコンピュータと人工知能を用いた研究」というページだった。ブロニスワフ・ピウスツキは1902年ごろから蝋管約100本に生のアイヌ語を録音したのだが、なにせ100年のうちには相当数が紛失。また日本の同化政策によって母語が失われアイヌ語を喋れる方が減少している状況では、アイヌ語に限らず、少数民族の言語は充分な量の学習データが集まらない。では保存や復興にどう対処すべきかと考えて、文法解析や長いフレーズを短い語形に自動分割させるプログラムを開発した。そのために人工知能や自然言語処理という現代の技術が役立ったという。Pepperロボとアイヌ語で会話するカロル・ノヴァコフスキ博士の様子をミハウ・プタシンスキ博士が撮っている――イランカラプテ。

ユゼフ・ピウスツキ博物館刊、アダム・ミツキェヴィチ・インスティテュート、ポーランド広報文化センター、北海道ポーランド文化協会が協力している。（村田譲）

# バヨン監督と阿寒コタンへ　ラファウ・ジェプカ

摩周湖で北海道の自然の中の
シーンのアイデアを語る
バヨン監督とグット撮影監督

2023年11月18～21日、有名なポーランドの映画監督フィリップ・バヨン氏がアイヌ文化をより深く理解するために北海道を訪れました。将来、資金を調達できれば、極東の諸民族や文化、特にアイヌの研究者として知られるブロニスワフ・ピウスツキの人生を描く長編映画を作ろうと考えています。

バヨン監督は、母校であるアダム・ミツキエヴィチ大学のアルフレッド・マイェヴィチ元教授と親交があり、アイヌとピウスツキに関する多くの情報を交換してきました。教授は樺太アイヌの歌を録音した蝋管の発見の歴史にも詳しく、彼の知識が映画の脚本に大きな影響があります。

## 阿寒コタンで

11月18日（土）監督一行を釧路空港で出迎え、レンタカーで阿寒に向かいました。コタンの土産物店でマリモの瓶などを購入した後、アイヌ工芸品店のオーナーで、アイヌの舞踏や儀式の演技者でもある西田さんに会いました。

これはポーランドの映画クルーとアイヌの方との初めての出会いで、聞きたいことがたくさんありました。西田さんは自分の家族について語り、グット氏にムックリ（アイヌの口琴）の演奏を教え、アイヌ語でいくつかの言葉を話してポーランド人ゲストはそれを録音しました。

〈左から〉バヨン監督、西田さん、
キシュカさん、ムルズさん、
グット監督

バヨン監督は、彼の映画でピウスツキの写真と同じ姿でアイヌを撮影し、役者がアイヌ語で会話することを望んでいます。予算ができれば北海道でのシーンも含めた壮大な映画を撮りたいそうです。

夕食後、私たちは2つの公演――アイヌ舞踏の披露と、北オオカミについての、現代のダンスとデジタルビジュアルを融合した物語――を観ました。公演の後、ムルズさんとキシュカさんは、イコロ劇場の若手スタッフとアイヌの血筋のアイデンティティについて話し合いました。

バヨン監督
（イコロ劇場にて）

## 摩周湖～硫黄山～

## 屈斜路コタンアイヌ民族資料館

翌日は一行を摩周湖に案内しました。この湖は地元のアイヌにとって重要な場所ですが、鋭い寒風のため長時間の写真撮影は難しく、湖は絵葉書ほど青くはなかったものの、映画製作者たちはこの場所の景色と自然に感動しました。

次は硫黄山を訪れ、火山を手で触れるほど近くでみて感動しました。その後近くの川湯温泉で評判の高い「お多福食堂」に向かい、ゲストたちは美味しい肉丼やチャーハン&ラーメンや蕎麦セットを一緒に楽しみました。彼らはまた、この昔ながらのレストランの内装を称賛しました。壁にはポスターや賞状、写真が掲示され、棚には剥製の動物やマンガが並んでいて、訪れた外国人には非常に魅力的だったようです。店主はグット氏がお相撲さんを描いたポスターに興味を持っているのに気付き、昨年秋場所のポスターをプレゼントしてくれました。

バヨン夫妻&キシュカさん（硫黄山にて）

最後の訪問地、弟子屈町の屈斜路コタンアイヌ民族資料館では、狐が神に捧げられる儀式を描いた映画を見て、昔のアイヌの生活を知るため、そこで収集された資料、道具や工芸品を見て多くの時間を過ごしました。

4人が札幌に到着したのは22:30すぎでした。翌日（月）は神威岬に向かい、（火）にはウポポイ博物館を訪れ、伝統的なアイヌの踊りを観賞し、佐々木博物館長や野本部長と面会して、11月22日（水）に帰国しました。　（Rafał Rzepka）

※バヨン監督一行のプロフィールは次ページをご覧ください

◆フィリップ・バヨン　1947年生まれ。ポーランドの小説家、脚本家、映画・劇の監督。映画芸術の教授、映画制作スタジオ「カドル」所長。数十本の映画や劇を演出し、プラチナ・ライオン功労章やポーランド復興勲章を含む約30の賞を受賞

◆マジェナ・ムルズ=バヨン　ジャーナリスト、旅行家、写真家。雑誌「ビジネストラベラー」編集長。私生活ではバヨン監督の妻

◆ウカシュ・グット　1980年生まれ。ポーランドの映画監督・撮影監督。グディニア・ポーランド映画祭のゴールド・ライオン大賞およびポーランド映画賞を受賞。彼の映画「Broad Peak」は日本の Netflix で視聴できる

◆イザベラ・キシュカ=ホフリク　2005年からポーランド映画芸術研究所職員。国際協力部門責任者、映画制作とプロジェクト開発責任者などを歴任、2017年10月から同研究所所長代行

2024 SAPPORO SNOW FESTIVAL　2024 SAPPORO SNOW FESTIVAL　2024 SAPPORO SNOW FESTIVAL

## ４年ぶりに開催された 第４８回国際雪像コンクール（２０２４/２/３～７）

ポーランド・チーム出場！

国際雪像コンクールには9か国が参加し、優勝に輝いたのはモンゴル・チームでした。ポーランドは残念ながら表彰台に上がることはできませんでしたが、日本でも評価と人気の高いボレスワヴィエツ陶器になみなみ入ったインクの中で月を釣ろうとしている「クレクス先生」を象った独創性あふれる雪像を制作して、見学に訪れる人々を大いに喜ばせました。

『クレクス先生のふしぎな学校』のおかげで、クレクス先生はもう日本の子どもたちにもおなじみのキャラクターですね。ヤン・ブジェフファ作のこの児童書は、小椋彩さんの翻訳で2023年に小学館より出版されました。*

（ポーランド広報文化センター所長
ウルシュラ・ オスミツカ）

〈左から〉オスミツカ所長＆チーム
Ｅ・ゲッペルト記念美術アカデミー
（ヴロツワフ市）の３博士たち
アンナ・コウォジェイチク、
ダニエラ・タゴフスカ、
プシェミスワフ・ピンタル
〈右端〉当協会の安藤会長

雪像「童話の偉大なるハンター」の解説から

この雪像は、ポーランド童話のユニークな登場人物、クレクス先生を描いたもので、ティーポットの縁に座り、カップ（インクで満たされているのであろう）から笑顔の月を釣り上げて皆に見せています。このポットとカップは、ボレスワヴィエツにある最も有名なポーランド陶器メーカーの製品を基にしています。童話は最も魅力的で美しい世界共通の文化です。

## 北海道医療大学 ルブリン国立医科大学 交流協定を締結

交流協定締結式にて

北海道とポーランドとの間の協力関係の促進は重要といえます。そこで、私たち（シルヴィアと夫・佐藤）が北海道医療大学に勤務し始めた2016年に、ルブリン国立医科大学歯学部との関係構築を始めました。ルブリン国立医科大学は、ポーランドで最大の国立医科大学の1つに数えられます。医学、薬学、歯学、健康科学などの学部があり、それぞれ専門の医療従事者を育成しています。

この関係構築に関わった全ての人たちの尽力により、北海道医療大学歯学部とルブリン国立医科大学歯学部との間で学部間協定を結ぶことができました。しかし、残念ながら、その直後の新型コロナ感染拡大により共同プロジェクトや学術・学生交流は中断されてしまいました。

そして、2023年に入り、ようやく薬学部との連携拡大を皮切りに交流が再開されました。その結果、2024年3月、薬学部を通じた大学間の協定が結ばれました。今後、他学部も含めた大学レベルでの学生・教職員の連携・交流の拡大が期待されます。

（シルヴィア・オレーヤージュ＆佐藤圭史）

* http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE109_p14BooksPanKleks.pdf

〈ルドヴィコ・ザメンホフ生誕 165 年記念 1859～1917〉

# 向井豊昭の エスペラント 関連小説 「Saitō Hidekatu」を再評価する意義

岡和田 晃

「ロシア語で話せ。ここはロシアの領土だ」と、警官が女に怒鳴りつける。「ポーランド人がポーランド語で言うのが、何が悪いのですか」と反論する男を、警官たちが連行していく。それを見ていた者のなかに、少年時代のザメンホフがいた。ポーランドのビアリストックでユダヤ人として生まれた彼は、かように屈辱的な経験を一つの契機とし、国際補助語たる人工言語・エスペラントを生み出した……。

この場面は、作家・向井豊昭（1933～2008）の小説「Saitō-Hidekatu」（小説集『ここにも』1976 所収）で紹介される、小学校高学年の国語の教科書に載っていたというザメンホフ伝の中の逸話である。

向井は1960年代から、小学校教員という立場からアイヌの教育をめぐる権利獲得運動に深く関わり、その葛藤を小説化して発表してきた。やがて「アイヌにとっては侵略者の言葉である日本語」で「アイヌの子どもたちにものを教える」ことに忸怩たる思いを抱くようになる。「あいつは階級意識がなかった」「あいつは教室ベッタリでアイヌ人民との結合はなかった」と後ろ指を指されながら、“同化教育の総仕上げ”とは別種の道筋を模索するようになる。

向井はエスペラントに活路を見出した。“日雇い労働者の学者”こと三ツ石清、アナキスト詩人の向井孝、後に『日本エスペラント運動人名辞典』を監修することになる峰芳隆、北海道エスペラント連盟の星田淳といった面々と、彼は交流を育んでいく。

「Saitō-Hidekatu」は、発表媒体が私家版の小説集『ここにも』=上図=であったため――詩人の更科源蔵や小説家の高橋実らに謹呈されたものの――読者は限定的だった。にもかかわらず、山形県でエスペラント運動やカナモジ運動、ローマ字運動を推進した先駆者・斎藤秀一（1908～40）を描いた代表的な小説として、今でも記憶されている。

## 「Saitō-Hidekatu」の主人公と語り手

小説内で語り手は、「治安維持法によってしょっぴかれ、病気にかかって」死んだ斎藤秀一の足跡を、鶴岡市図書館所蔵の秀一日記を精読することで追い直す。「「20ページ ヲ ヒラキナサイ！」／ヒトゴロシ／チュウギ ト オシエル／ココロ ワ クライ」と書きつける秀一の筆致に、人間味を見出すのだ。「神様じゃないんだよ。山の中の学校からぬけだすことを考えたりしてさ。身につまされちゃってるんだ」という述懐に代表される心情の揺れ動きこそが、この小説をユニークにしている。

秀一は庄内方言を矯正し、やがては日本語のローカリティそのものの消滅をも夢見ていた。他方の語り手は、そこまで理想を追求できない。東京生まれで疎開先の下北で育ち、下北では標準語、東京では訛りがあるとみなされる経験を有していたからである。地域と普遍の狭間で揺れ動く思いを克明に書きつけているがゆえ、刊行から半世紀近く経ってもなお、本作は読むに値するものとなっている。

## アイヌ口承文芸のエスペラント訳

エスペラントにも限界はあったが、向井はアイヌ口承文芸をエスペラントに訳すなどして、それに向き合った。ハンガリーのナチ党員による裏切りを描く文芸評論家ベンチク・ヴィルモシュの小説「シャーネックの死」の訳は、復刻し現在でも入手できる（『向井豊昭傑作集 飛ぶくしゃみ』2014 所収）。

エスペラントを「思想」的に捉える動きは“オールド左翼”とみなされて久しい。2020年に“Esperanto”の名を全編英語の雑誌に冠する、かなり露骨な文化盗用が起きたが、多数の“リベラル文化人”が同誌に参加し、大新聞も追随した。当然起きたエスペランチストたちからの批判を、なぜか党派的に圧殺せんとする動きさえあった。

そこで私は、こうした反動を時評で批判するとともに、文芸評論家の東條慎生の協力で2013年に再刊した「Saitō-Hidekatu」を、オンラインで読めるよう無料公開した。*

昨年、私は受け持っている大学の講義で向井とエスペラントについて紹介したところ、受講生たちは誰一人、エスペラントの存在すら知らなかった。私が中学校のときには、英語の教科書でザメンホフについて習ったものだが、今や言語帝国主義への内在的批判という問題意識そのものが、忘却されようとしているのかもしれない。私たちは、もっと思い悩む必要があるのではないか。

（おかわだ・あきら、文芸評論家・作家、東海大学非常勤講師）



* http://genshisha.g２.xrea.com/mukaitoyoaki/mukaiEsp.html

ワルシャワ蜂起
博物館展覧会

# 「ワルシャワ。灰の中から甦る不死鳥」

オープニング・イベント
8/8（木）～9（金）
札幌市資料館 2階 研修室
※オープン日は調整中です

2024. 8/8（木）～31（土）
会場：札幌市資料館（旧札幌控訴院）2階 ミニギャラリー
主催：ワルシャワ蜂起博物館
パートナー：ポーランド広報文化センター，ポーランド共和国外務省

この展覧会は、ワルシャワ蜂起 80 周年（1944～2024）記念事業として計画されました。首都の崩壊に特に焦点を当て、占領下のワルシャワの姿をありありと描いています。戦争による壊滅の象徴である広島との関連も示されます。廃墟から立ち上がり、今日では近代的でダイナミックな大都市となったワルシャワの復興が、最終章のキーワードです。

札幌市資料館　札幌市中央区大通西 13 丁目
地下鉄東西線「西 11 丁目」駅 1 番出口より徒歩 5 分

開館時間　9 時～19 時（入館無料）
会期中の休館日　8 月 13 日、19 日、26 日
https://www.s-shiryokan.jp/

入場無料、予約不要【お問合せ先】080-4071-0956 (安藤)
hokkaidopolandca@gmail.com

〈第 113 回例会〉ワルシャワ蜂起 80 周年記念 特別朗読会

2024. 8/18（日）
13:00 開場/13:30 開演
会場：札幌市資料館2階 研修室
主催：北海道ポーランド文化協会

13：30～15：00　朗読会
15：15～16：30　交流会（茶菓付き）
〈詳細はただいま検討中です〉

今年は、8 月に開催されるワルシャワ蜂起博物館展覧会「ワルシャワ。灰の中から甦える不死鳥」と連携して、ワルシャワ・ヒロシマ・ナガサキを想起しつつ、戦争・崩壊・復興・平和をテーマとして、それに関連するさまざまな作品（10 分程度）の朗読を募ります。出演ご希望の方は下記へお問い合わせください。多くのお客さまのご来場をお待ちします。

入場無料、定員 60 席、予約推奨【お問合せ/申込み先】080-4071-0956 (安藤) hokkaidopolandca@gmail.com

=写真= 昨年の「午後のポエジア」の情景（撮影 尾形芳秀）

## 第38回 定例総会＆懇親会は 10月12日！

昨年の懇親会風景

国指定重要文化財

緑豊かな中島公園内の豊平館で土曜日の午後みなさまとお目にかかれるのを楽しみにしています。（なお、朗読会「午後のポエジア」は8月18日（日）開催です：11ページご参照）

さらに、夕刻に開催される懇親会は、ピアノの美しい調べとともに軽食＆ドリンクを楽しみながら文化交流を行います。さまざまなアトラクションのご提案を歓迎します。

お友達とお誘い合わせでお越しください。（会長＆事務局）　※総会＆懇親会の出席確認のハガキを8月末にお届けします

**会員動向（2024.1~4）**　入会：木村-須田廣美　（敬称略）

**ご寄付（2024.1~4）深謝!**　（1口千円）（2）石田レイ子

**年会費（2023.9~2024.8）納入のお願い**　年会費：一般3,000円、学生1,500円
また、維持会費としてご寄付（1口千円：任意）も承ります

◆ゆうちょ銀行振替口座【記号】02740 5【番号】19735【加入者名】北海道ポーランド文化協会
（他銀行から送金の場合）店番（279）預金種目（当座）店名（二七九[ニナナキユウ]店）口座番号（0019735）
◇北洋銀行（本店営業部）普通預金口座【店番号】028【口座番号】0605084【名義】ホッカイドウポーランドブンカキョウカイ　※「北洋銀行アプリ」を利用すれば、北洋銀行口座間の送金手数料は無料です
※ご請求額は個別の納入依頼（振替用紙同封）をご覧ください
※遠方の方はご寄付（年千円）で会誌 POLE の定期読者になることもできます。事務局にお問合せください

**寄稿募集**　本誌への寄稿を募集します。〆切は毎年3月末/7月末/11月末、分量は1000～1500字程度、テーマ、ジャンルは自由です。詳細は下記事務局の電話・メールへお問合せください

### POLE112 目　次

《第111回例会》講演＆ビデオ上映「カティンの森事件とモンゴル・シベリア抑留」（井手裕彦、建部奈津子）‥ 1
《第112回例会》講演と報告とドキュメンタリー映画『Ainu｜ひと』上映（長田佳宏、溝口尚美）‥‥‥

# POLE no.112 (May 2024)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

Announcement: Lecture and video screening “Katyn Forest Massacre and the Internment of Japanese in Mongolia and Siberia” (H. Ide, N. Tatebe) 1
Announcement: Lecture, report, and screening of the documentary film “Ainu - Indigenous People of Japan” (Y. Osada, N. Mizoguchi) 2
Report: Video viewing of Polish masterpiece movies 2024 “11 Minutes” by Jerzy Skolimowski (M. Ikeda) 3
Essay: Reception of F. Chopin in Japan (3) (M. Kawasome) 4
Book Review: “100 lat z dziejów polskiej muzyki” by D. Gwizdalanka (K. Takahashi) 4
Announcement: Agnieszka Holland's controversial film "Zielona Granica" to be screened in Sapporo 5
In memory of Mr. Chiyomaro Shimoda (J. Rodowicz, N. Nagaya, A. Kobayashi) 6
Book Review: “Inne, a jednak Dziady” ed. by Jadwiga Rodowicz-Czechowska (J. Murata) 7
Visiting Akan Kotan with Polish film director Filip Bajon (R. Rzepka) 8
Report: Polish team at the 48th International Snow Sculpture Competition in Sapporo (February 3-7, 2024) (U. Osmycka) 9
The Health Sciences University of Hokkaido and the National Medical University of Lublin signed an international exchange agreement (S. Olejarz, K. Sato) 9
Essay: The significance of reevaluating Toyoaki Mukai's Esperanto-related novel "Saitō-Hidekatu" (A. Okawada) 10
Announcement: Warsaw Uprising Museum Exhibition and the 13th “Afternoon Poesia”, August 2024, Sapporo 11
Announcement: 38th Annual Meeting and Reception 12